

「いま」の実践に熱中しよう

上うえ廣ひろ榮えい治じ

一年のうちで最も大きく生活が変わる時節がまたやってきます。入学、進級、卒業、就職、そして、異動や転勤、あるいは定年退職の時期でもあります。多くの人にとって、三月はそれまで慣れ親しんだ日々に訣別する月で、四月は新しい生活を始める月です。

大学へ入った、就職先が決まったということ、親元を離れて、遠い大都会で一人暮らしを始める若者も少なくないはず。親しかった人たちと別れて、まったく新しい人間関係を築いていく。この、過去と訣別して、新しい生活を始める時期に垣間見せる人々の真摯な姿、とりわけ、過去への未練を振りきって、新しい希望の実現に意欲を燃やす初々うづうしい姿に、いつも私は心を動かされます。

山口瞳さんの小説に『居酒屋兆治』という中編があります。高倉健の主演で映画化され、その後、テレビドラマにもなったといえますから、ご存じの方も多いいと思います。

学園都市にある主人公の店では、この時期になると、卒業で離れ離れになる恋人たちの、別れを惜しむ姿が見られます。学校を卒業して、遠い町に就職する青年と東京に残る娘。地方の実家に帰らなくてはならない娘と、東京の会社に勤めることになった青年。いろいろな事情で、遠く離れることになった二人が、別れ

を惜しみ、必ずまた二人でこの店に来ようと涙ながらに誓います。

「ところがね、これが、案外、まとまらないのよ。……あんなにね、泣いたり喚わめいたり、誓ったりするけれど、結局、駄目だめなのよ。不思議なもんだね」と、寡黙な主人公はほそりと言います。

全部がそうだとはい限らないでしょうが、私には「案外、まとまらない」ことが、ごく自然なことのように思われます。なぜなら、人は常に新たな希望によつて生きるものだからです。過去にとらわれている者より、新しい希望に生きる者のほうが、健全で仕合わせだと思つてからです。

三月に学校を卒業し、四月に新社会人になります。あるいは転勤で新しい職場に移ります。定年で第二の人生を歩み出す人もいるでしょう。そして、これまでとはまったく異なる新しい生活が始まります。新しい人との出会いがあり、新しい勉強や仕事があります。

すると、新しい希望が生じます。新しいより善い生活を実現したいという希望、新しい学問や仕事をより善く習得したいという希望、より善い人間関係を築きたいという希望などです。

そして、さまざまな希望を実現しようとする努力が始まります。正しい方向で真摯な努力が行なわれている場合には、日一日と自分は希望に向かっているという実感が持てるはずです。自分の希望を、自分の力で実現しつづくと実感できるとき、それは私たちにとつて、最も仕合わせなときなのです。

仕合わせを実感している人は、過去にとらわれることがありません。過去の感傷を引きずることもありません。ただ、「いま」の課題に熱中して生きています。

それぞれに新しい生活を始めた恋人たちが、自分の新しい生活の中に芽生えた新しい希望の実現に夢中になって、互いに疎遠になったとしても、少しも不思議ではありません。彼らは不実なのではなく、「いまを生きる」ことに忠実であるだけなのです。「いま」の希望を実現する喜びの中にあるのです。

「につぼん熱中クラブ」(NHK衛星第二)という楽しいテレビ番組があります。その名の通り、いま何かに熱中している若者たち、つまり、いまの希望を実現することに熱中している仕合わせな若者たちが毎回登場する番組です。

例えば、昨年紹介された若者たちの中に、北海道北部のおといねっぶ美術工芸高校工芸部の生徒たちがいました。音威子府村おといねっぶは天塩川てしおがわのほとりの、村全体が森林に囲まれた、北海道で最も人口の少ない村で、旭川から北へ百二十キロの地にあります。

全寮制のこの高校には、全国から工芸が好きな生徒たちが集まってきて、工芸技術を学び、自分で作品をデザインし、自力で制作しています。彼らは思い切り好きなことをしているのです。

もちろん、工芸高校だからといって、工芸の授業ばかりではありません。工芸の授業は一日二時間ほどにすぎません。しかし、授業が終わると夕食の時間まで、部活で作品づくりにはげみます。そして夕食後も寮で二時間、作品のデザインをします。これが、毎日続くのだそうです。

中途半端な興味や関心では、とてもついていけないスケジュールですが、誰もが自発的に、実に楽しそうに、そして熱心に自分の作品づくりに没頭しています。一つの作品のためにスケッチブック一冊分のデザイン案を書きつけます。デザインに半年以上をかける生徒もいます。デザインがかたまるところで、制作が始まります。

少しずつ形が姿を現わし始める。そのときがいちばん楽しいと彼らは言います。それはその通りだろうと思います。なぜなら、私たちの仕合わせは、希望が実現したときではなく、希望を実現しつつある過程に、そして、そうした「いま」にこそ、あるからです。

希望が実現したとき、つまり、おといねっぶ美術工芸高校の若者たちにとっては、作品が完成したときは、

もう次の作品、より善い作品に向かつて、新たな一步を踏み出すときなのです。

それはちようど、学業成つて、卒業するときと同じです。古い希望が実現したら、そこを卒業し、次に向かわなければなりません。卒業したからには、新しい目標、新しい希望の世界に踏み出さなければなりません。過去にとらわれていることは許されたいのです。

この高校の寮で暮らす生徒たちに、お笑いタレントのインタビュアーが、「寮生活つてさびしくない？」と尋ねます。「そりゃあ、友達とかに会えなくなるから」。「友達つて彼女のこと？」という突つ込み、彼はちよつと逡巡してから「もう、すっかり忘れてただけ」と応じていました。

楽しい生活、充実した毎日、自分の力で目標に肉薄している仕合わせは、容易に昨日のことを忘れさせてしまうのです。しかし、あの充実して仕合わせに見えた彼らも、三年生はこの時期にはもう卒業を迎えていることでしょう。二年生や一年生も、やがて卒業しなければなりません。

それまで仕合わせだった分だけ、学園と別れる辛さは大きなものになるでしょう。しかし、彼らは学園にとどまることはできないのです。新しい世界に踏み出さなければならぬのです。

もちろん彼らだけではありません。私たちはみな、仕合わせな今日にとどまっていることはできないのです。だから毎朝、誓うのです。「今日一日、新しく大地に生き貫きます」と。昨日はもう卒業しました。今日は昨日よりも「より善い」一日にいたします。新しい希望に迫ります、と誓うのです。

あの若者たちが、常に「いま」の創作活動に熱中していたように、私たちも、昨日よりも「より善い」今日を目指して「いま」の実践に熱中する、そんな仕合わせな日々を重ねていこうではありませんか。

